

思いの戦い



ティーチング・レター
著者 デレク・プリンス

あなたは、何かうまういかなかったことを、自分の落ち度だと思い込んだことがありますか。自分が希望する仕事に就くことはできないだろうと思っていましたか。面接をする前に、すでにそう思い込んでいましたか。あなたはその仕事に就くことができましたか。あるいは、自分の子どもが車で家に帰るとき、事故に遭うに違いないと思い込んだことがありますか。その後、無事に子どもは家に着きましたか。あとで振り返ってみると、なぜ、そんな心配をしていたのかと不思議に思うことがよくあります。そして、心配していたことは、「考えすぎだった」という結論にたどり着くことがあったでしょうか。

それは意外なことではなく、聖書は「考えすぎ」症候群について言っています。私たちは、用心深くしていないと、関係が壊れ、良くないことが起こるという、さまざまなシナリオを想像してしまう者になり得るということを、神は知っておられます。ですから、神は、私たちが自制心を失いやすいことを認め、それを克服するための助言をみことばの中に組み入れてくださいました。

これら私たちの思いの中の戦いは、実際、クリスチャン生活に普通にあるものです。コリント人への手紙第二十章で、パウロはこれについて非常に鮮明に語っています。3 節で彼は言っています。

「私たちは肉にあって歩んではいても、肉に従って戦ってはいません。」

パウロは、私たちは物質的な世界に肉体を持って生きていると言っています。同時に、私たちは戦いの中にありますが、その戦いは、肉体や物質の領域のものに挑むものではありません。それは異なった領域のものです。4 節で彼は説明しています。

「私たちの戦いの武器は、肉の物ではなく、神の御前で、要塞をも破るほどに力のあるものです。」

私たちのこの戦いは、肉の領域ではないので、神は私たちにふさわしい武器を与えてくださいました。その武器は、肉の物ではなく、霊的なものです。神は、要塞を破る霊的武器を私たちに与えてくださいました。この戦いには、私たちと神に敵対する要塞があります。パウロは、続けて5節でこの要塞について描写しています。

「・・・さまざまの思弁と、神の知識に逆らっ
て立つあらゆる高ぶりを打ち砕き、すべてののは

かりごとをとりこにしてキリストに服従させ・・・」

これらのことはすべて、思いの領域に語ってきます。さまざまの思弁と神の知識、すべてのはかりごとをとりこにします。パウロは戦いの場所が思いであることを明確にしています。

ですから、あなたの思いにプレッシャーがあることは、不自然や異常なことではありません。それはクリスチャン生活の一部です。それは必ずしも、あなたが何か間違ったことをしているとか、間違った道にいるというしるしではありません。クリスチャンとして経験するものの一部に過ぎません。

内なる敵

私のクリスチャン経験で、ある一時期、驚くべき発見をしました。私の内に神の敵がいたのです。私はクリスチャンで神に仕えているにもかかわらず、私自身の思いの中に私の敵がいることを発見したのです。ローマ 8:7 でパウロは説明しています。

「というのは、肉の思いは神に対して反抗するものだからです。それは神の律法に服従しません。いや、服従できないのです。」

私は、非常に高い教育を受けて育ちました。一流大学に通い、教授になりました。しかし、問題は、私の思いが神の敵に教育されていたことでした。私の内側には、常に高度な教育を受けた、神の敵がいたのです。

多くの人は、教育を信用します。しかし、教育はあなたの思いを神の敵であることから変えるものではありません。単に、神の敵の方法であなたの思いを教育するだけです。あなたが肉の思いを持って神学校に5年通っても、おそらく、あなたは内側に高い教育水準の肉の思いをもって卒業するでしょう。

それは、すべて完全に変わらなければならないのです。

コリント人への手紙第二でパウロは、神は私たちにふさわしい武器を与えてくださった、と言っています。この戦いに用いる武器は多くありますが、最も必要な武器は、神のみことばと、祈りに時間を割くという2つであると私は信じます。

クリスチャンになって最初の頃、私は自分のからだのいやしのために丸1年間、みことばに信頼しなければならないという経験をしました。マタイ4:4でイエスは、人は「神の口から出る一つ一つのことばによって」生きると言っています。私はそれを体験しなければなりませんでした。その年の終わりに、私はからだがいやされただけではなく、まったく異なった思いを持っていました。違う考え方をすることを学んだのです。私は、みことばに従って考えることを学んだのでした。

しかし、誤解しないでください。その1年間の学びでは、多くの祈りの戦いがありました。私には真理の道への戦いがありま

した。疑い、失望、恐れなどの悪魔の嘘を祈りによって拒絶しなければなりません。みことばと祈りという2つの強力な武器を用いることにより、私は徐々に自分の思いの中の戦いに勝利していきました。

3つの要塞

第二コリントで、パウロは「要塞」について語っています。別の訳では、「思いの要塞」とも訳しています。それはどのような要塞でしょうか。私はこれをじっくり考えてきました。そこで、3つの項目に分けて分かち合いたいと思います。

一つ目は、高ぶりです。悔い改めのないすべての人間の思いの最大の要塞は、利己心、自衛心、自己賞賛などの高ぶりです。

ほぼすべての人種や国々は、いくらかの民族的誇りを持っています。私はイギリスで生まれました。私は、イギリス人はプライドの高い民族であると思います。イギリス人が自分たちはプライドの問題を抱えていると認めるには、時間がかかるでしょう。

ドイツも、国家としてのプライドの歴史を持った、もう一つの国です。ヒトラーが、ドイツ人だけでなく、ドイツ人クリスチャンの群衆をさえ支配できた鍵は、国家主義であると私は思います。

教派のプライドは、この要塞と見なされる一面です。「私は自分の教派を理解しているので、たとえそれが聖書のことばであっても、私の教派の教理にそぐわないことは何も言わないでください。」と言う人がいます。このように言う可能性があるのは、バプテスト派、メソジスト派、ペンテコステ派、長老派など、数え上げればきりがありません。あなたが、プロテスタントやカトリック、また長老派、ペンテコステ派、その他の教派であれ、ある特定の教派の名のもとにすべてを縛り付けるなら、あなたの思いの中に、プライドの要塞があると私は考えます。

二つ目は、プライドから生まれてくる、偏見です。それは、あなたが事実を聞く前に、思いの中で組み立ててしまうものです。それは偏狭で、横柄で、破壊的です。

三つ目の要塞は、先入観です。知らないものを知っているかの
ように考え、はっきりとしていないものを、鮮明に描いている
つもりになっているのです。

あなた自身の要塞をチェックする一つの方法を提案させていただきます。上記に挙げた要塞の中で一つでも、自分に思い当たると感じるなら、何らかのかたちで取り扱われなければならないと素直に認めるべきです。それに向き合う最大の重要性は、それらの要塞があなたの人生にみことばが入ることを妨げるからです。詩篇 119:130 から学ぶことができます。

「みことばの戸が開くと、光が差し込み、わきまのない者に悟りを与えます。」

どうして、私があなただけのことをこんなにも知っているかと思われるかもしれません。私はあなたのことを知りません。私が知っているのは、私たちみんなについてです。私たちはみな、これらの要塞に影響を受けやすいものです。私たちはみな、思いの中に霊的戦いがあり、神は勝利のための武器を私たちに与えてくださっています。

私は、それらの武器をどのように用いるかを直接学びました。1949年から約9年間、私はロンドンの教会で牧師をしていました。自分の奉仕において、ある程度成功を収めました。私たちの教会では、人々が救われ、癒され、聖霊のバプテスマを受けるのを常に見ることができました。しかし、私には、答えを見いだせない個人的な問題がありました。特に、暗く重い雲のようなものに覆われる、うつが発作が頻発する問題があったのです。その雲は、私を押しつぶし、人との(自分の家族とさえも)普通のコミュニケーションからも切り離すかのようでした。

解決法に終わりが来ました。ある日イザヤ 61:3 が、私の目をくぎ付けにしました。

そして、なぜ主に仕えたいと願えば願うほど、プレッシャーが重くなるのわかりました。というのは、その霊の使命は、神のための奉仕を妨げることだったからです。私が少し怠慢で無

神が救いや、いやし、解放など、あなたのために介入するほとんどの領域で、これは当てはまると私は考えます。神はご自身の役割をし、あなたがあなたの役割をするかどうかはあなた次第です。あなたの役割とは、神が与えてくださったものを手放さない、維持するということです。

